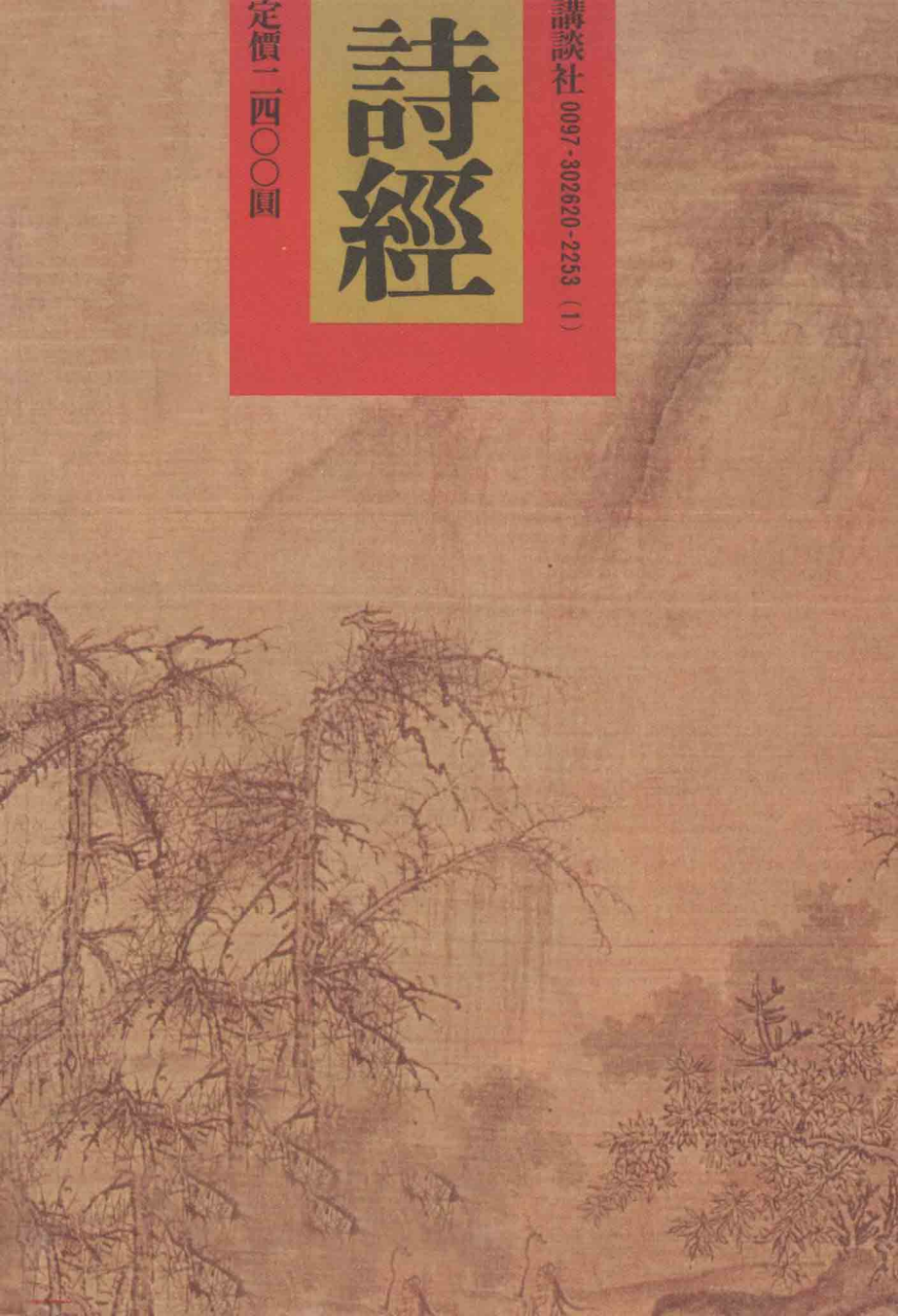
詩經

講談社 0097・302620・2253（1）

定價二四〇〇圓



詩經

詩經

昭和四十九年九月三十日　發行
昭和五十一年二月二十日　二刷

譯者　海音寺潮五郎

裝釘者　杉浦康平＋海保透

發行者　野間省一

發行所　株式會社講談社
東京都文京區音羽二―一二―二一
郵便番號　一一二
電話　東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）
振替　東京三九三〇

印刷所　三協美術印刷株式會社
製本所　小島製本株式會社

落丁本・亂丁本はお取替へ致します
©海音寺潮五郎　昭和四十九年

（文2）

はしがき

詩經は五經の一つとして、古來、中國文化圏の國々では知識人必讀の書とされてゐました。論語の末章の堯曰篇の最末に、「子曰く、命を知らざれば、以て君子たる無きなり。禮を知らざれば、以て立つ無きなり。言を知らざれば、以て人を知る無きなり」とあります。この場合の「言」を、荻生徂徠は先王の法言であるとし、それは詩經と書經を意味すると解釋してゐます。つまり、詩經は聖人が選擇したり、作つたりした文學を集めたものであり、書經は先王の作爲した歷史記錄の書である、すなはち、文學と歷史を知らなければ、人間といふものはわか

らないと孔子は言はれたと、徂徠は解釋してゐるのです。私は全面的にこの說に贊成です。

孔子がその弟子等を敎育する上に、いかに詩を重んじたかは、論語を通讀したことのある人なら、氣づかない人はないでありませう。どうやら、孔子の時代には、場合々々に應じて適當な詩句を誦して自らの意志を通ずるのが、紳士たるもののたしなみでもあつたやうです。左傳を讀めば、それがはつきりとわかります。

私が詩經の飜譯をやり出したのも、實を申せば中國の古典を讀む便宜のためでした。經書類は申すまでもありませんが、史書でも、特に左傳にはよく詩經の詩が出て來ます。そのたびに詩經をめくつて、その詩を檢出しなければなりません。檢出すれば詩として味はふために日本語の詩に飜譯してみるといふ作業もしなければなりません。さういふ風にして出來た飜譯詩が、いつか相當數たまりました。あるとき、こんなことなら、頭から全部やつてしまへといふ氣になりました。もう十數年前のことです。はじめました。「風」の部はおもしろくておもしろくて、たしか一月くらゐの間にやつてしまつたやうに記憶してゐます。「雅」「頌」はなかなか手をつける氣になれずほつてゐましたが、一昨年、慶應病院に四ヶ月以上も入院しましたので、その間にやつてしまひました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

これはもともと私の讀書用のためのもので、そのはじめは世間に發表する氣はなく、大學ノートに書いてゐたのですが、朝日新聞社から出てゐる季刊雜誌「アジア・レビュー」に所望されて、滿四年にわたつて連載しまして、「風」の部だけはをはりました。

いろいろ書きたいことがありますが、あとでまた書くことにします。

昭和四十八年七月一日

海音寺潮五郎

目次

國風

周南 一
召南 三六
邶風 四四
鄘風 八八
王風 一三三
鄭風 一五一
齊風 一八〇
魏風 一九四
唐風 二〇五
秦風 二三三
陳風 二三九
檜風 二五〇
曹風 二五五
豳風 二六二

小雅
鹿鳴之什　二六一
南有嘉魚之什　三〇五
鴻鴈之什　三三五
節南山之什　三四二
谷風之什　三八一
甫田之什　四〇六
魚藻之什　四二六
大雅
文王之什　四五一
生民之什　四七九
蕩之什　五〇八
頌
周頌　五五九
魯頌　五八三
商頌　五九九

カバー・表紙　郭熙・溪山秋霽圖　〈宋時代＝フリーア美術館所藏〉
見返　宋本・詩集傳　〈商務印書館「四部叢刊」所收〉

詩經

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

國風

周南・召南

周の南方一帶の民謠を採取して、周の朝廷の樂師が譜したものであるといはれてゐる。後に出て來る雅や頌ほどではないが、他の國々の風（民謠）にくらべるとかなりに莊重な感がある。周南は周公旦の采地であつた土地の詩、召南は召公奭の采地であつた地方の詩といはれてゐる。

周南

この詩は結婚式の時うたつたものといふ。

●關雎

關々雎鳩　　關々タル雎鳩ハ　　みさご鳴く
在河之洲　　河ノ洲ニ在リ　　河の洲に
窈窕淑女　　窈窕タル淑女ハ　　みさご二つゐて
君子好逑　　君子ノ好逑　　鳴きかはすや
　　ほろほろと。
　　よき家に

參差荇菜
左右流之
窈窕淑女
寤寐求之

參差タル荇菜ハ
左右シテ之ヲ流ム
窈窕タル淑女ハ
寤寐之ヲ求ム

求之不得
寤寐思服
悠哉悠哉
輾轉反側

之ヲ求メテ得ザレバ
寤寐思服ス
悠ナル哉　悠ナル哉
輾轉反側ス

しら玉のたをやをとめはこもりゐて
よき若人の迎へ待つらむ

川中に
むら立ちしげるあさざ菜は
えらびえらびて　よきをとる
しら玉のたをやをとめは
いづべにぞあらむ
夜も晝も
さがしもとむる

心みつる得ざれば
寢ねても寢ねず
さめてもさめず
思ひわづらふ
わづらひなやみ
憂へやまず
寢がへりつづく

參差荇菜
左右采之
窈窕淑女
琴瑟友之

參差タル荇菜ハ
左右シテ之ヲ采ル
窈窕タル淑女ハ
琴瑟シ之ヲ友トセン

むら立ちしげるあさざ菜は
あさりあさりて
よきをえらびぬ
しら玉のたをやをとめよ
つひに得て妻とせり
ともに琴、ともに瑟
いざともに奏で
いざともに樂しまむ

參差荇菜
左右芼之
窈窕淑女
鍾鼓樂之

參差タル荇菜ハ
左右シテ之ヲ芼ブ
窈窕タル淑女ハ
鍾鼓シテ之ヲ樂シマシメン

むら立ちしげるあさざ菜は
すぐりすぐりて
よきをとりぬ
しら玉のたをやをとめよ
つひに得て妻とせり
鐘鼓鳴らさしめ
いざともに聞き
いざともに樂しまむ

●葛覃

葛之覃兮
施于中谷
維葉萋々
黄鳥于飛
集于灌木
其鳴喈々

葛之覃兮
施于中谷
維葉莫々
是刈是濩
爲絺爲綌
服之無斁

葛ノ覃ヒルヤ
中谷ニ施ル
維レ葉萋々タリ
黄鳥于ニ飛ビ
灌木ニ集ル
其ノ鳴クコト喈々タリ

葛ノノビルヤ
中谷ニウツル
維レ葉莫々タリ
是レ刈リ是レ濩ル
絺ト爲シ綌ト爲ス
之ニ服シテ斁フナシ

くずのびる

をなごはいそがしものぢやわな
春が老ければ眞葛がのびる
谷間一ぱいのびてくる
蔓もしげれば　葉もしげる
繁みに高麗うぐひすが
ピピコピヨ　ピピコピヨと鳴きかはす

なんぼかえ氣色ぢやけど
のんびりだらりと見てをれぬ
眞葛がいよいよのびて來て
蔓葉がいよいよはびこれば
刈つて煮て、糸とつて
細布荒布織らねばならぬ
えいさえいさと働いて
つらいなんどと言うてはをれぬ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com